

# 私の愛犬物語

経済学部 教授 細田衛士ほそだ へいじ

小さい頃から犬が好きでなんとか飼いたいと思っていた。小学校3年生の頃だったと思う、友達の家の子犬が産まれたので、強引に母を説き伏せ、父の許しを得ないまま子犬を家に連れて帰った。案の定、父は激怒した。1週間後、学校から帰って見ると、子犬の影は跡形もなかった。父の知人らしき人にもらわれて行ったのだ。あのときの悲しさと子犬の臭いだけは今でも忘れない。

それから数十年後、義理の母と2世帯住宅に住むことになった。犬を飼う絶好のチャンスだ。だが犬を飼う責任を全うできるか不安だった。あるとき、無類の犬好きの高草木光一経済学部教授に相談すると彼はズバリ、「そんなに好きなら飼えばいいんです、責任なんて後からついてきますよ」。これで決まった。

よくよく同僚には恵まれたものだ、小室正紀経済学部教授の紹介で立派なゴールデンレトリバーの子犬が家に来た。メスなので織女にちなんでヴェガ(写真)と名付けた。子犬の世話と躰たはは並大抵ではないが、厳しく躰けたせいで引き綱がなくても私の真横の位置で歩けるまでになった。もちろん私の命令は絶対だ。

経済学部長時代にはいろいろタフなこともあったが、ヴェガが癒やしてくれた。私の機嫌が悪いと、遠くから首をかしげながらじっとこちらを見つめている。「ヴェガ!」と呼びかけると、まっしぐらに私の懐に飛び込んで来る。彼女の大好物はリングと空豆だ。夏、ビールのつまみに空豆を食べていると、必ずねだりに来る。与えてはいけないのだが、ついやってしまう。

そんなヴェガも4年前12歳9カ月の天寿を全うした。息を引き取る直前の時のことだ、私が近寄ると最後の力を振り絞って精いっぱい尻尾をふった。別れの辛さを身にしみて味わった。

もう犬は飼うまいとも思った。しかしヴェガとの別れから2年の月日が経つと、またどうしても犬が欲しくなった。家内を説き伏せ、2匹目の犬を飼い始めた。ヴェガも許してくれると思う。今こうして原稿を書いている私の足元で、新しい子犬のセラがスヤスヤと眠っている。



## 談話室

教員によるエッセイコーナー